



先進校の取組

体育におけるオリ・パラ教育を通じて、スポーツとの多様な関わりを学ぶ
～ 低学年「ころがしボールゲーム（ゴールボール）」の実践を通して～

千葉市立蘇我小学校

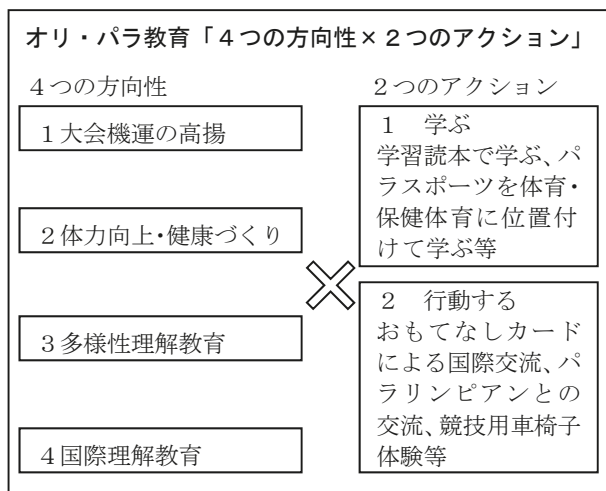
1 はじめに

全校児童 688 名である本校は、「豊かな心と学ぶ意欲をもち、たくましく生きる子どもの育成」を学校教育目標とし、知・徳・体のバランスのとれた児童の育成を目指して、教育活動を展開している。

平成 29 年度は千葉市教育委員会保健体育課より「千葉市体育・保健体育におけるオリンピック・パラリンピック教育（以下「オリ・パラ教育」）モデル校」、平成 30 年度は「オリ・パラ教育実践重点校」の指定を受け、低学年での実践を通して、その在り方について検討を重ねている。本稿では、この 2 年間の、本校の実践について、特に「ころがしボールゲーム（ゴールボール）」について紹介する。

2 オリ・パラ教育で目指すもの

千葉市では、平成 28 年 5 月に「千葉市オリ・パラ教育実施方針」を策定した。このなかで、オリ・パラ教育「4つの方向性×2つのアクション」が示された。本校で



も、体育科において、パラスポーツを年間指導計画に位置付け、実際に学習することで、「する」「みる」「支える」などのスポーツとの様々な関わり方を学ぶとともに、多様性を尊重し共生社会に生きる資質を養うことを目指している。具体的には、2 年生で「ころがしボールゲーム（ゴールボール）」、5 年生で「シッティングバレーボール」を取り扱うこととしている。

3 実践について

(1)指導資料「I'm POSSIBLE」の活用

オリエンテーションや特別活動の際に、日本パラリンピック委員会発行の指導資料を活用した。資料には、パラスポーツの実際の競技の様子や各競技の行い方などが映像としておさめられている。これらの映像を単元の前後で視聴することにより、学習前にはパラスポーツの概要を知ることができ、学習後にはパラリンピアン の 技能や精神力の高さを再認識することができた。そのことで、児童の障がい者に対する捉え方が「助ける対象」から「それぞれの分野で活躍している人」へと変化していった。

(2)2 年「ころがしボールゲーム」の実践

ゴールボールは本来、「アイシェード」という目隠しをした状態で、全身の感覚を研ぎ澄ましてボールを受け止めたり、相手ゴールにシュートしたりすることが楽しいスポーツである。しかし、低学年の実態から、狙ったところに素早く転がしたり、攻守が入り混じったゲームを行ったりすることは難しい。

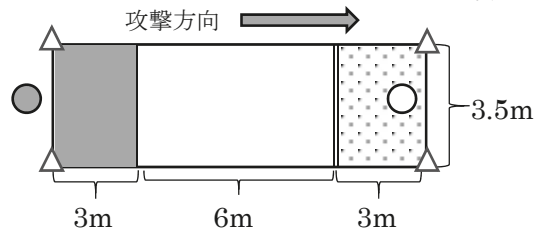
そこで、平成 29 年度は、1 対 1 で目かくしをした状態でボールを交互に転がし、得点を競い合うゲームを考え、実践した。ゴールとなるカラーコーンの間隔の大小や、投げる距離によって得点のルールを設定できるようにした。ボールについては、体に当たっても痛くないように、鈴入りソフトタッチボールやソフトバレーボール（高学年用）を手提げポリ袋に入れたものを使用した。攻守の準備ができてからゲームが始まるため、児童は安心感をもって学習に取り組むことができた。目隠しをしているため、技能差が縮まることから、普段は運動に消極的な児童も意欲的に学習に参加する姿が見られた。また、審判や得点係などの役割をチーム内でローテーションして行っていたので、児童が主体的にゲーム運営に関わる姿が多く見られた。

しかし、目隠しをしてゲームを行うことから、静けさの中でボールを感じられるよう、大きな声を上げず、静かに学習に参加することを指導したため、仲間と得点を喜び合ったり、動き方や守り方をアドバイスしたりして関わり合うことが難しくなり、ゲーム、ボール運動の楽しさを十分に味わえとは言えない場面も見られた。

平成 30 年度はこれらの課題を踏まえ、対戦している児童以外については、審判や得点係に加え、同じチームのプレイヤーの補助（助言）も交代制で行うことにした。具体的には、得点が入ったかどうか、ボールが相手にとられたかどうか、安全上の問題はないか、先ほどの攻防を受けて、次はどのように動いたらよいかなどを助言したり、質問したりすることができるようにした。また、気持ちを表現する際にはジェスチャーを活用するとよいことを指導し、チームごとに表現方法を話し合った。

互いに質問、助言できるようになった結

ころがしボールゲーム（低学年）の場合 （平成 30 年度）



- * 攻撃側は、網掛けした範囲であれば、どこから転がしてもよい。
- * 守備側は、エンドライン(二重線)から先にボールが行かないよう、 内で防ぐ。

【基本のルール】

- ・1 チーム 4 名。試合を待っている間は審判やプレイヤーの補助(助言)などを交代制で行う
- ・ボールは一人 2 回ずつ転がす。
- ・チーム全員が投げ終わったら攻守交代。
- ・チームの総得点で競う。
- ・サイドラインからボールが出たら得点なし。

果、児童は、同じチームの児童に「ここを狙うといいよ」「点が入ったよ。やったね。」「さっき転がしたボールはどこに転がっていった？」など、やり取りをする姿が多く見られるようになった。そのことで、ゲームに対する不安が解消され、より楽しんでゲームに参加する児童もいた。事後のアンケートでは、「パラリンピックに興味がある」「ボランティアや応援などで参加したいと思う」と答えた児童が事前に比べ増加した。実際に目隠しをしてパラスポーツに近いゲームを体験したことで、児童のパラスポーツに対する興味も高まった。

4 おわりに

新学習指導要領でも、パラスポーツを適切に取り扱うこととされている。しかし、具体的な取り組み方や評価規準の設定など課題は多い。ポジティブな遺産（レガシー）を 2020 年以降も残していけるようなオリ・パラ教育を目指し、今後も実践と検証・検討を重ねていきたい。